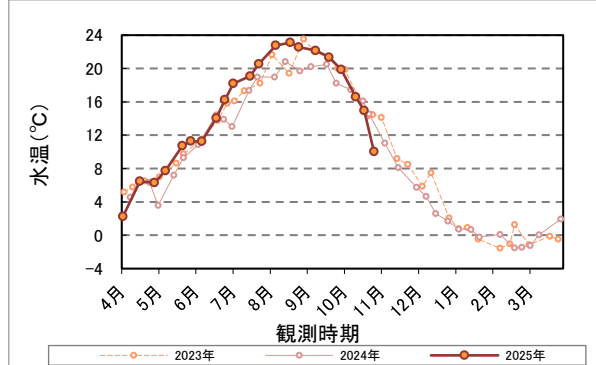


◎オホーツクタワーの動物プランクトン分析速報 (2025年10月)

※海洋観測：紋別市、動物プランクトン分析：(株)エコニクス

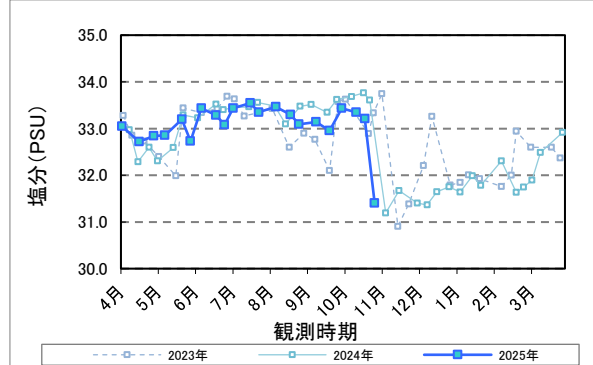
海洋環境データ

◎水温

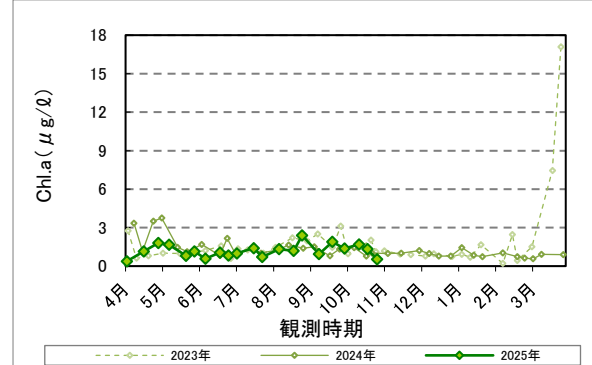


※水温、塩分、Chl. aは0~9mまでの平均値である。

◎塩分



◎Chl. a



出現量の多かった種類



・Acartia steueri ● (カイアシ類：7カイアシ・スチレイ) 体長：♀1.1-1.6mm、♂0.9-1.3mm。北西太平洋沿岸に分布する。日本では北海道から琉球列島にかけての内湾と沿岸で出現する。湾奥の底層で層間に群れることがある。



・Paracalanus parvus s. l. ● (カイアシ類：コヒゲシジノコ) 体長：♀0.8-1.0mm、♂0.7-1.0mm。全世界の沿岸域表層。日本では各地沿岸に分布するカラナス目優占種の1種で、本州中部では春に、東北以北では夏に多くなる。



・Tortanus discaudatus ■ (カイアシ類：トウモロコシイサカガ-オス) 体長：♀1.4-2.8mm、♂1.4-2.5mm。日本海、北太平洋、チウクチ海、ベーリング海および北西大西洋に分布する。内湾性。



・Oithona atlantica (カイアシ類：オウゴン・アトランティカ) 体長：♀1.1-1.4mm、♂0.8mm。太平洋、インド洋、大西洋の寒帯・亜寒帯に分布する。日本では冷水域の沿岸・外洋で普通に出現する。



・Spionidae (larva) (多毛類：スピオ科の幼生) 多毛類の発生途中の幼生。スピオ科は典型的な堆積物食者で、一般に内湾の泥中に生息する多毛類であるが、中には貝殻に穿孔して生活するものも含まれる。

概要

Table with 3 columns for dates 10月11日, 10月18日, and 10月26日. Rows include average water temperature, salinity, Chl. a, sedimentation, and species lists for NORPAC and standard nets.

※海洋環境データ欄の水温、塩分、Chl. aのグラフは、水深0~9mまでの平均値をプロットしたものである。平均水温、平均塩分、平均Chl. a欄の数値は、表示の都合上、水深0~9mまでの平均値を小数第2位で四捨五入した値で示し、グラフ上の表示と異なる場合がある。

※種名の先頭に“◎”がつく種類は、出現量の多い種類を示す。[]内の“+”はサンプル中の個体数の多さが後述の程度であると判断し、区分したグループである(+)[出現、++]やや多い、[+++]多い、[++++]かなり多い、[+++++]極めて多い。

※種名の後ろの記号は、分析者の経験から北海道における出現傾向に後述の特徴があると判断し、区分したグループである(●)冷水性種、(●)暖水性種、(■)汽水性種。

※10月のサンプルには珪藻類(植物プランクトンの仲間)、腐植質(主に枯死・分解した植物由来の物質)が多く含まれており、沈殿量の数値はこれを含む。

※参考文献：①千原・村野(1997) 日本産海洋プランクトン検索図説[東海大学出版会]②山路(1966) 日本海洋プランクトン図鑑[保育社]③岩国市立ミクロ生物館 監修(2011) 日本の海産プランクトン図鑑[共立出版]

④Wilson, M. S. (1966) North American Harpacticoid copepods, 8: The Danielssenia sibirica group, with description of D. stefanssoni Willey from Alaska. Pac. Sci. 20 (4), 435-444.

⑤Pinchuk, A. I. & Hopcroft, R. R. (2006) Egg production and early development of Thysanoessa inermis and Euphausia pacifica (Crustacea: Euphausiacea) in the northern Gulf of Alaska. J. Exp. Mar. Biol. Ecol. 332, 206-215.

⑥林(2006) 水産無脊椎動物学入門[恒星社厚生閣]⑦Ohtsuka, S., Itoh, H. & Mizushima, T. (2005) A new species of the calanoid copepod genus Centropages (Crustacea: Centropagidae) collected from Shimizu Port, middle Japan: Introduced or not? Plankton Biol. Ecol. 52 (2), 92-99.

⑧西・加藤(2002) 日本産カムリゴカイ科多毛類の分類について。タクサ. 13, 5-17. ⑨今島(1996) 環形動物 多毛類[生物研究社]⑩日本プランクトン学会 監修(2011) ずかん プランクトン[技術評論社]⑪水島・鳥澤 監修(2003) 漁業生物図鑑 新 北のさかなたち[北海道新聞社]

⑫古賀(1960) Centropages abdominalis SATOのノープリウス幼生。日本水産学会誌. 26 (9), 877-881. ⑬伊藤・水島・久保田(2005) 駿河湾三保沖におけるカラナス目カイアシ類の季節的消長。東海大学紀要海洋学部. 3 (1), 19-35.

⑭大越・野村(1990) 穿孔性多毛類Polydora属による北海道地方、東北地方沿岸のホタテ貝浸食状況。日本水産学会誌. 56 (10), 1593-1598. ⑮峯水・久保田・平野・リンズィー(2015) 日本クラゲ大図鑑[平凡社]⑯奥谷(2017) 日本近海産貝類図鑑【第二版】[東海大学出版会]

⑰大塚・上田・岩淵・伊東・徐・坂口・平野・木村・上野(2007) 移入種か、在来種か? 清水港から記載された浮遊性カイアシ類の1種の導入の可能性を検証する。日本プランクトン学会報. 54 (1), 30-38. ⑱西村(1992) 原色検索日本海産動物図鑑【I】[保育社]